

浩志会 2019年度 10月度月例会 (10月9日開催)

高橋明也先生 美術史家・三菱一号館美術館館長

「日本の美術館の現状と未来像」 ご講演内容 (要旨)

#### <三菱一号館について>

- ・三菱地所が「事業」として取り組んでいる。
- ・2010年に開館、ジョサイア・コンドルが設計した旧三菱一号館を復元した。
- ・私は当時、国立西洋美術館に勤めていたが、三菱地所という私企業が街づくりと並行して美術の保護や文化の発信、形成に取り組む趣旨に共感してジョインすることとした。
- ・現在、東京駅近辺の企業が運営する美術館5館でネットワークを作り、足並みを揃えて発信しようとしている。東京駅近辺の5館とは、東京ステーションギャラリー、出光、三井記念、三菱一号館、アーティゾン (旧称ブリヂストン)。ステーションと一号館はロケーションは良いが作品収蔵数 (オリジナルコレクション) が少なく、他の3館には非常に豊富な世界的コレクションがあるのが特徴。
- ・但し、ここ最近の傾向として、日本の企業の美術や文化発信への取り組みが以前よりも低調な印象がある。

#### <国立西洋美術館勤務時代の展覧会について>

- ・バーズ・コレクション展 (1994年)。107万人を集客し、戦後ベスト3に入る記録的な展覧会となった。
  - ・ジョルジュ・ド・ラ・トゥール展 (2005年)。展覧会当時、17世紀フランスの画家ラ・トゥールは、残る作品数も少なく世界的に知られるが、日本ではほぼ無名に近かった。しかし、国立西洋美術館が日本にあった作品1点を購入できたため、本展が実現。これをきっかけに非常に注目される画家となった。
- バブルの時代に、相当数の美術作品が日本に流入し、その後再び流出したが、まだ日本に残っている作品も多い。集客も24万人ほどに達し、美術界の話題となった。知られざる作家に光を当てていく意義は大きい。
- ・松方コレクション展 (2019年)。松方コレクションは国立西洋美術館開館の基となったコレクション。今回の注目は失われていたモネの「睡蓮」の修復展示。40万人の集客があった。
  - ・こうした展覧会の多くは、これまで新聞社等大手マスコミの主催・協力・協賛を主軸とし、美術館自身では予算や要員を独自に構えずに運営してきた。この手法には長短あるが、短所はマネジメントノウハウが美術館に蓄積されなかったこと。こうした経験から、私は三菱一号館に移るにあたり、「自立できる美術館」を目標として取り組んだ。

#### <三菱一号館における展覧会について>

・これまでの主な展覧会として「マネとモダン・パリ」（2010年）、「奇跡のクラークコレクション—ルノワールとフランス絵画の傑作」（2013年）、「ヴァロトン、冷たい炎の画家」（2014年）、「画鬼・暁斎 KYOS—幕末明治のスター絵師と弟子コンドル」（2015年）、「Paris オートクチュール—世界に一つだけの服」（2016年）、「オルセーのナビ派：美の預言者たち—ささやきとざわめき」（2017年）など。特徴は、19世紀末を中心としながら、ジャンルにあまりこだわらず、他の館であまり手掛けないような個性的なテーマの展覧会が多いこと。これは世界的にも一号館美術館の特徴として認知されだしている。

・三菱地所からは1日ほぼ1,000人、年間30万人以上の集客を期待されている。今のところクリアしてきているが、状況は次第に厳しくなる見込み。

・集客の期待に応えられるよう、知恵を絞り、工夫を凝らすも、企画時点で実際の集客を予想するには限界があるのが悩ましい。

#### <日本の美術館の歴史と現況>

・明治期は、東京、奈良、京都に博物館があるのみ。美術に特化した国立美術館は存在しなかった。

・大正から昭和初期（戦前）にかけて、大原、大倉、白鶴など、財を成した企業経営者が集めたコレクションを展示する美術館が登場してくる。

・戦後は、日本初の公立近代美術館である神奈川県立近代美術館が開館（1951年）。地方自治体が設立するという趣旨が、当時大変先進的であった。現在は、地方も含め各県や政令市など主要な市に公立の美術館が整備されてきている。

・日本では恒久的に同一作品を同一の公開空間で長時間にわたって展覧、鑑賞するスタイルがまだ一般的ではなく、〇〇展といった特別展、展覧会開催時に鑑賞するスタイルが主流。

・一方、西洋では、市井の人々が日常的に美術館を訪れ鑑賞するカルチャーが定着している。日本ではまだまだ敷居が高く、日常生活の中に織り込まれている、とまではこなれていない。日本の美術館は敷居をいかに低くできるか、が課題のひとつ。

・日本（人）の特徴として、昔から一年ないし数年に一度「秘仏」の御開帳に多くの人が集まる傾向がある。つまり、「日常的」ではなく、限定された期間で「お祭りの的」に見て楽しむ、というカルチャーがあるのではないか。こうした歴史的な生活習慣が「展覧会」での集客が多く賑わう一方で、常設展にはさほど人が集まらない一因かとも思う。

・また、著名な作者の展覧会を開くとまず集客で困らない一方で、美術館本来の使命としては、未だ知られていないアーティストに光をあて、広く知らしめていくことも大切。美術館としての自立のためには、集客は一定程度欠かせないが、本来果たすべき使命とのギャップに悩む。

・来館者の高齢化、すなわち若年層の来館者が少ない点も課題。

・日本の美術館は全般に Digital 化は遅れている。Digital とアートをコラボした展示は、

最近の若年層に人気がある。

・日本においては美術のジャンルにヒエラルキーがない。漆器や陶磁器、染色などの工芸品に寄せる日本人の思いは強い。他方、西洋では絵や彫刻は人体表現を核にした美の理想、すなわち思想と造形の融合した、神の作り出した理想を具現するものとして、他のジャンルより断然上位にある。

・越後妻有アートトリエンナーレや瀬戸内芸術祭などの例にあるように、自然とアートの一体感を大事にするのも日本の芸術祭の特徴。

#### <世界の美術館の現況>

・ニューヨーク。メトロポリタンを筆頭にセントラルパーク沿いのストリートに美術館が集中している。

・パリ。ルーブル、オルセーなどセーヌ川の両岸に集中している。

・ベルリン。市内を南北に流れる川の中州に美術館が集中し通称「美術館島」と呼ばれている。

・このように、世界の主要都市では、一定のエリアに美術館や博物館を集中的に配置している。東京は上野公園に集中しているが、都心とは言い難い。また、地方都市ではさらに中心から外れる。都市形成の過程で、美術館などの文化施設が中心にある欧米都市との大きな違い。

#### <新しい美術館の形>

・昭和後期に「聖地型」美術館が誕生してくる。北九州市立美術館、群馬県立近代美術館など、著名な建築家が設計し、美術館に訪問すること自体が目的化されるような仕掛けを備えた。

・戦後に設立された公立美術館の多くは老朽化が進む一方、予算が不足し、しっかりとした修繕もままならない。集客に期待するにも、後発の地方の公立美術館は市街地には建設できず、郊外に立地しアクセスに難がある。人口が減少に転じ、町の規模が小さくなっていく今の時代には合わなくなってきた。

・こうした例として、四国にある大塚美術館。著名な作品を陶板で焼いて、触れるようにしている。あるいは徳島県立近代美術館。いい作品を収蔵しているが、地元のタクシー運転手にも知られておらず、年間で2万人の集客しかない。これでは赤字は必至。

・好アクセスを確保、市民により身近に美術を感じてもらえる新しい取り組みとして「駅美術館」に注目している。日本では「東京ステーションギャラリー」「えき KYOTO」。海外でも新しい試みとして、スイス・ローザンヌの駅に隣接して美術館の建設がなされている。

・別の新しい形の美術館としては「サイトスペシフィック型」の美術館。好例は金沢21世紀美術館。兼六園の近くにあり、金沢の観光ルートにしっかり組み込まれている。地中美術館（ベネッセアートサイト直島）も、世界中に知れ渡り、多くの外国人が直島を訪れるよう

になっている。

<質疑応答>

Q：企画展をマスメディアが主催する弊害について。主催メディアだけが取り上げ、中立的な評価が出てこない、といった事象はないか？

A：メディア主催の展覧会はどうしても収益優先になる。実は日本の近代美術の展覧会は昨今めっきりなくなった。それは集客が見込めないからである。メディアの方も分かってはいるが、企業として取り組む以上、集客が見込めない展覧会は開催しにくい現実がある。

Q：日本の美術館内のマナーについて。私語厳禁が厳しすぎる。なぜ私語がいけないか？

A：私語緩和は大賛成。話ながらインスピレーションを得ることもある。日本の場合、見ているお客様からクレームが出るのが課題。例えば三菱では「トークフリー」のフリートーキデーを設け、好評である。

Q：損保ジャパンの美術館事業の管理運営をしている立場から。三菱一号館の特徴を一言でいえば？

A：経営体。独法でもなく三菱地所という私企業の一部門であること。よって収支は重要なチェックポイント。短期でいえば正直赤字だが、三菱地所はよく我慢してやっていると思う。しかし、美術館の存在はそもそも長期スパンで考える話なので、短期的な利益追求とはそもそも相反する面はある。

Q：丸の内地区との共生をどう工夫されているか？

A：その点は三菱地所として大変重視している。丸の内界隈で勤めている方が活用し、活用されているか、の観点で常にあるべき姿を模索している。

Q：観覧料の設定のし方について。観覧料が高止まりの印象がある。少しでも低廉に設定すべきと思うが？

A：国立西洋美術館時代は、(国立なので)むしろ有料はありえないと思っていた。しかし一方で無料集客した場合、入館者の質が落ちる課題がある。よって、一定程度有料にするメリットはある。低廉に設定しすぎて大混雑となり「押すな押すな」の状態での鑑賞になってもいけない。でも、実際には、保険料や輸送費など、展覧会の経費は上がる一方。その中で例えば、場合によっては私立美術館は入館料を上げ、その代り、今までの美術鑑賞とはちがった特別な体験を提供するなどの特徴は出せるかもしれない。

Q：学芸員の確保、養成について。無名の作家を発掘していきたいが、学芸員の質、量の確保があつて可能なこと。打ち手はあるか？

A：積極的に海外に出ていく事が重要。海外の美術館で日本人の研修員が少ない印象あり。国内の専門性だけが深まり、どんどんタコツボ化している感がある。仕組を作って学芸員を海外に派遣し、様々な可能性を広げられるような取り組みが必要ではないか。知識だけは溜まっていくが、リアルな体験が不足すると、新しい知恵も発想も出てこない。

Q：明治生命館は重要文化財。一号館は何故未登録？

A：当時の建物ではなく、復元した建物だから。但し、資材の一部は当時のものを転用している。

Q：展覧会のリハーサルは行われるのか？

A：取扱い厳重注意の作品がほとんど。よってリハーサルはほぼ無く、ぶっつけ本番がほとんど。

Q：アジアの国々の美術の捉え方と日本との差は？

A：日本は一般的に美術に対する関心は高い。とはいえ、まだまだ教科書的な教養に留まる部分も多い。他方で、社会の中で必須な恒久施設としての美術館の存在と利用には比較的淡泊。アジアの国々は植民地時代以前には美術教育一般もなかったところが多く、一部の国を除いては、いまだ自国の歴史的見直しさえ進んでいない国も多い。台湾などは例外的に美術館施設も多く、教育カリキュラムと連動して、日本より巧みに鑑賞者を増やしている。

以上